

青年期における Time Perspective の研究¹

— extension と自己像の関連について —

陶 山 智

岡山理科大学企画入試部企画課

(昭和63年9月30日 受理)

問題と目的

Lewin (1956) は、time perspective を「ある一定の時点における個人の心理学的過去および未来についての見解の総体」と定義している。そして、Wallace (1956) は、extension を「概念化された将来の時間的範囲の長さ」とし、この用語を将来に限定して用いている。これらに対し Wohlford (1966) は、まず個人の personal time² を「対象が過去または未来にある認知の並び全体」と定義し、time perspective に類似の概念を改めて提出した。そして、temporal direction は過去・未来の区別により決定されるとしたうえで、extension を「認知の及ぶ時間的範囲の長さ」とし、過去への extension を retrotension、未来への extension を protension と呼び分けている。

現代において青年期を迎える個人は、time perspective の確立および分化という課題に直面し、対峙する世界が広くかつ未知であるばかりでなく、社会変動の激しさという今日の問題も加わり、葛藤と緊張にみちた深刻な様相を示しつつある。従って、現代に生きる青年の心理を把握し彼らの行動を理解するうえで、identity 確立過程の time perspective の様相、あるいはメカニズムを明らかにすることは重要な研究課題である。

本論文では、time perspective の1つの次元である extension と自己像との関連を探ることにより、青年期における自己像の諸側面の中で、time perspective の extension との関係にあって、重要かつ有意な側面を明らかにすることを目的とする。そのために、自己像尺度として、個人が実感している気分、感情、自己の在り方をできる限り明確化することを目的に作成された村瀬・村瀬 (1966) の尺度を用い、体験している感情過程の諸様相の表明と extension がいかに関連しているかを検討する。

Time perspective の extension 指標としては、直接的技法として Events Test を、間接

¹ 本研究は、昭和60年度日本大学大学院文学研究科心理学専攻修士論文の一部にデータを追加し、加筆・修正をしたものである。また、本研究の要旨は、日本教育心理学会第30回総会において発表した。

² 本論文では、都築 (1982a) の研究で使用された広義の意味での time perspective という用語を採用し、個人の personal time という用語は便宜上以降使用しない。その他の用語については、Wohlford の定義に従う。

的技法として Thematic Apperception Test (TAT) を用い、protension ないし retrotension を評価した。TAT の time span 評定にあつては、Wohlford (1968) のスコアリング マニュアルに従い、protension・retrotension の両方向につき、cognitive 得点と empirical 得点の2種類の得点を与えた。cognitive と empirical のモダリティは Murray (1959) の未来に関する prospection・ordination の区別に対応するものであり、cognitive 得点は、予期された、ありそうな、望まれた又は意図された、妨げられた、仄めかされた行動にもとづいており、empirical 得点は、直後の、具体的な、一連の行動にもとづいている。

Wohlford (1966) は、直接的技法である personal association (PA) 測度を用い、positive な感情は protension を長くし、negative な感情は protension を短くすることを実験によって確かめている。しかし、間接的技法である TAT の測度では、この仮説を支持する結果を得ていない。また、都築 (1982b) の研究において、現在の自己像がより positive な者は自分の未来をより positive に見る傾向があり、現在の自己像がより negative な者は自分の未来をより negative に見る傾向があることを報告している。これらのことから、positive な感情ないし自己像は time perspective の諸指標と関連すると考えられる。

一方、TAT の time span の得点化方法に疑問が投げかけられている。1 つは時間継起—刺激図版によって引き出される time span が異なる—についてであり (Wohlford, 1970; 小川, 高橋, 吉野, 長塚, 1974; Dickstein, 1975), もう 1 つは、被験者のある表現に対し評定者がどれほどの time span を認めるか、つまり評定についてである。Squyres (1981, 1982) は、これまでの研究における評定者間の高い信頼性係数を再現することができなかったと報告している。そこで、Wohlford (1968) のスコアリング マニュアルに修正・加筆の上、実施手続きに工夫を加え、この 2 点の信頼性を検討する。

本研究の目的は、以下の通りである。

- (1) TAT の extension 指標の信頼性を検討する。

実施手続きに後述する質疑段階を加え、Wohlford のスコアリング マニュアルに修正・加筆を行った。

- (2) Events Test と TAT より引き出された extension 指標と自己像尺度との関連をみる。
- (3) Events Test (直接的技法) と TAT (間接的技法) から引き出された extension 指標相互の関連をみる。

方 法

1. 被験者及び実施期間

Events Test・自己像尺度……4 年制大学の女子学生³ 49 名。年齢のレンジは 18~23 歳。平均年齢は 21 歳、標準偏差 1.17 であった。

³ 性差の要因を除外するために女子のみを被験者とした。

TAT……上記49名中43名に実施し、40名のTATプロトコルを採用した。尚、ランダムに4名のプロトコルを取り出し、time spanの評定練習に用いた。従って、分析の対象となった被験者は36名である。この36名の年齢のレンジは18~23歳。平均年齢は20.9歳、標準偏差は1.23であった。実施期間は、1985年7月3日から同年12月16日であった。

2. 手 続 き

Harvard版TAT9枚(1, 2, 3 BM, 4, 10, 13MF, 14, 16, 20), Events Test, 自己像尺度をこの順で個別面接によって実施した⁴。なお、TATの質疑段階(物語に含まれているtime spanを直接被験者に尋ねる)は、自己像尺度の施行後に設けた⁵。

(1) TAT: 反応段階における教示は、「戸川行男・絵画統覚検査解説」に拠った。質疑段階の教示は、Teahan (1958), Klineberg (1967)の研究で使用された教示を参考に作成した⁶。実施にあたっては、被験者の自発性を引き出すよう努め、テストの反応は相づち程度に抑えた。しかし、反応時間が短い場合(目安を4分)と、過去または未来を物語に欠く場合に限って促しを行った⁷。反応段階、質疑段階の過程はテープレコーダーで録音し、time spanの評定に用いた。また、反応段階の要旨を筆記し、質疑段階での情報が評定上不十分な場合の質問材料とした。

(2) Events Test: “これからのあなたの人生の中で起こると思われる10の事柄と、その時のあなたの年齢を次に書いて下さい。”と問い、挙げられた出来事の起こる年齢のメディアンと、被験者の現在の年齢との差をもって protension 指標とした (Wallace, 1956; 都築, 1981; 陶山, 1987)。

(3) 自己像尺度: 村瀬・村瀬 (1966) の自己像尺度より木村 (1983) が選択し用いた25対の項目からなるSD法形式の尺度で (Table 1), 対の順序, 左右はランダムに並べかえ, 現在の自己像を7段階で評定させた。

(4) TATのtime spanスコアリングシステム: 反応段階, 質疑段階での反応(録音テープ, 筆記録)を主に Wohlfordのマニュアルに従って評定した⁸。評定者間の一致度を高めることに主眼を置いて, Epley & Ricks (1963) と Squyres (1981) を参考にしてマニュアルに補足・修正を行った⁹。得られたtime span変数はCognitive Retrotension (RetC)・Empirical Retrotension (RetE)・Empirical protension (ProE)・Cognitive Protension

⁴ この他, Events Testの後, 自己像尺度の前に, Orientation Test, 時制に対する評定尺度, Circles Testを実施したが, 本論文では取り扱わなかった。

⁵ Events Test等における得点化方法の意識化を妨げるため。

⁶ Appendix 1 参照。

⁷ Appendix 2の(5)を参照。

⁸ 質問段階で得られた情報をもとに評定値の修正を行った。これは, 例えば, 小説を書き上げるのに1ヵ月で足りる人もいれば, 10年を必要とする人もいるからである。

⁹ Appendix 2 参照。

Table 3 TAT の評定者間の信頼性係数
(N = 12)

extension 指標	RetC	RetE	ProE	ProC
<i>r</i>	.977***	.787**	.909***	.992***

p* < .01, *p* < .001

Table 4 TAT の extension 指標の信頼性係数
(N = 36)

extension 指標	RetC	RetE	ProE	ProC
<i>r</i>	.769***	.868***	.805***	.891***

****p* < .001

結果と考察

1. TAT のスコアリングの信頼性

2 人の評定者間の一致度をみることで評価した。その方法は、36名の被験者から12名のプロトコルをランダムにとりだし、独立に評定を行った上で、被験者ごとに4指標それぞれの平均値を算出し、ピアソンの偏差積率相関係数を用いて一致度をみるというものであった。結果を Table 3 に示す。指標ごとの平均値を用いて信頼性を検討した研究には、Epley & Ricks (1963) と Dickstein & Blatt (1967) の研究がある。前者では protension で .66, retrotension で .74 を報告し、後者では protension で .872, retrotension で .916 を報告している。未来と過去それぞれに2種類の extension 指標を用いた本研究では、これらと比較し同様あるいは以上の相関係数を示した。

2. TAT の extension 指標の信頼性

折半法的（提示順の奇数偶数折半、4枚対5枚）な信頼性係数を求めた。Table 4 に示した積率相関係数は、スピアマン・ブラウンの公式によって修正したものである。Dickstein (1969) は6枚の図版を用いた研究で、.574 という信頼性係数を報告している。そして、この低い信頼性係数は図版枚数の少なさによるとして、最低10枚は必要であると言及している。本研究では9枚の図版を用いたが、その信頼性係数は十分に高く、課題の検討を可能にするものであった。

3. 自己像尺度との関連

被験者36名を TAT の extension 4 指標について上位群 (H 群) 18名、下位群 (L 群) 18名に分け、自己像尺度の項目対ごとに平均値を比較した。群間で有意差がみられた項目対を Table 5 に示す。

RetE 指標すなわち過去の明確な広がり指標は、他の指標に比べ多くの項目対で有意差がみられ、しかも全てに共通して H 群が L 群より自己を positive に評価している。この結果は、より広がりのある過去の明確な脈絡づけと positive な自己像との密接な関連を示唆するものである。Table 6 には各 extension 指標の平均値を示した。過去の明確な広がり指標 (RetE 指標) の平均値が当てはまるカテゴリーは、上位群 (H 群) で1ヵ月—6ヵ月、

Table 5 TAT の extension 指標と関連があった自己像尺度の項目対

extension 指 標	negative (1点……………4点……………7点)	—	positive	Mean		t-test
				L 群	H 群	
RetC	無 価 値 な	—	価 値 ある	4.94 (1.20)	> 4.05 (1.06)	*
RetE	不 活 発 な	—	活 発 な	4.27 (1.13)	< 5.22 (1.06)	*
	心を閉じた	—	心を開いた	4.50 (1.15)	< 5.55 (0.98)	**
	おびえている	—	安心している	4.39 (1.24)	< 5.33 (1.37)	*
	弱々しい	—	力強い	3.78 (1.35)	< 5.50 (1.04)	***
	不 潔 な	—	清 潔 な	4.83 (0.92)	< 5.61 (0.98)	*
	不 純 な	—	純 粋 な	4.83 (1.38)	< 5.67 (0.97)	*
	空 虚 な	—	充 実 した	4.17 (1.10)	< 5.22 (1.22)	**
	よそよそしい	—	親しみのある	4.72 (0.89)	< 5.72 (0.89)	**
ProE	無 価 値 な	—	価 値 ある	4.94 (1.20)	> 4.06 (1.06)	*
ProC	無 価 値 な	—	価 値 ある	5.06 (1.06)	> 3.88 (1.05)	**
	よそよそしい	—	親しみのある	4.89 (1.02)	< 5.56 (0.92)	*

t 検定 (両側検定) * $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$, () : SD

Table 6 TAT と Events Test における extension 指標の平均値

		TAT				Events Test		
		RetC	RetE	ProE	ProC	protension 指標**		
H 群 (N=18)	Mean	7.67	5.65	4.89	7.17	H 群 (N=16)	Mean	17.43
	(SD)	(0.37)	(0.74)	(0.96)	(0.81)		(SD)	(4.37)
	category*	1年～ 4年	1ヵ月～ 6ヵ月	1週間～ 1ヵ月	1年～ 4年	M 群 (N=14)	Mean	7.91
							(SD)	(0.80)
L 群 (N=18)	Mean	5.73	2.86	1.93	4.43	L 群 (N=16)	Mean	4.00
	(SD)	(0.96)	(1.01)	(0.77)	(1.01)		(SD)	(1.77)
	category	1ヵ月～ 6ヵ月	1時間～ 24時間	1時間 以内	1週間～ 1ヵ月			

* 各群の平均値が該当するスコアリングルールにおける time span カテゴリーを示す。

** 単位：年

下位群(L群)で24時間—1週間であった。従って、本研究の被験者が青年期にある女子学生であることから、実生活における過去の明確な脈絡づけは自我の安定につながると考えられ、自我同一性確立過程にあって、将来の脈絡づけよりもむしろ過去の明確な脈絡づけが自己像に重大な影響を及ぼすものと推測される。

また、4指標中3指標(RetEを除くRetC, ProE, ProC)において、「無価値な—価値ある」の項目対で有意差がみられた。これらの関連は共通しており、L群がH群に比べ有意に自己を価値あると評価している。つまり、extensionが短い被験者がより自己を価値あると評価しているということで、RetE以外のextensionの伸びを妨げる要因として自己価値意識といったものが関連していると考えられる。

ここでEvents Testのprotension指標と自己像尺度との関連をみると、Table 7に示す

Table 7 Events Test の protension 指標と関連があった自己像尺度の項目対

negative (1点……4点……7点)	—	positive (1点……4点……7点)	Mean			t-test		
			L群	M群	H群	L×M	L×H	M×H
無価値な	—	価値ある	4.33 (1.35)	3.86 (1.17)	4.93 (0.85)			**
依存したい	—	自立したい	4.19 (1.47)	5.64 (1.08)	5.43 (1.15)	**	*	

t検定 (両側検定) * $p < .05$, ** $p < .01$, () : SD

Table 8 Events Test protension 指標の H 群・L 群にみる TAT extension 4 指標の平均値と SD および t-test の結果

Events Test の protension 指標	H 群 (N=18)	Mean (SD)	TAT			
			RetC	RetE	ProE	ProC
	L 群 (N=17)	Mean (SD)	7.12 (1.09)	4.70 (1.61)	4.00 (1.60)	6.14 (1.53)
			6.28 (1.22)	3.81 (1.64)	2.82 (1.68)	5.46 (1.74)
		t-test	*		*	

t検定 (両側検定) * $p < .05$, () : SD

ように、上位群 (H 群) 16名・中位群 (M 群) 14名・下位群 (L 群) 16名の 3 群間にあって、「無価値な—価値ある」の項目対において H 群・M 群間に有意差がみられた。この関連は TAT の extension 指標の場合と異なっており、extension 指標の値が高い群、つまり見通しのよい被験者が、中程度の被験者に比べ自己を価値あると評価している。

従って、未来の extension についてのみではあったが、自己像尺度を通しての TAT と Events Test の extension 指標比較より、extension の短い被験者がより自己を価値あるとする関連は、TAT の time span に特徴的なものではないかと考えられる。

4. 測定技法間の関連

Time perspective のある次元、例えば extension 次元における調査技法の選択にあたっては、経験的基礎となる比較データがほとんど見当たらず、便利さ、研究者の好み、そして以前の調査における成功が一般的な基準となっているようである (Rakowski, Barber, & Seelbach, 1983)。本研究では、直接的技法である Events Test と間接的技法である TAT より extension 指標を得た。そこで、extension 指標相互の関連をみることで、測定技法に関する理解を深める。

Events Test の protension 指標の得点によって、上位群 (H 群)・下位群 (L 群) の 2 群に分け、TAT 4 指標につき群間比較を行った (Table 8)。その結果、有意差がみられた指標は、RetC・ProE の 2 指標であった。また、Events Test の protension 指標と TAT

Table 9 Events Test の protension 指標と TAT の extension 4 指標との相関 (N=35)

	TAT			
	RetC	RetE	ProE	ProC
Events Test の protension 指標	.187	.114	.294(*)	.064

(*) $p < .10$

Table 10 TAT の extension 指標相互の相関 (N=36)

	RetC	RetE	ProE	ProC
RetC				
RetE	.680***			
ProE	.457**	.549***		
ProC	.703***	.668***	.732***	

** $p < .01$, *** $p < .001$

4 指標間の積率相関係数を求めたところ (Table 9), いずれも有意水準に達しなかった。Wohlford (1966) は, 直接的技法として personal association (PA), 間接的技法として TAT を用い, extension 指標における技法間の関連を調べている。相関係数で表わされたその結果は, protension で .11 ($P < .10$), retrotension で .05 と有意水準に達していない。

被験者の標本数が十分大きくなかったことを考慮し, これらの結果を総合すると次のようになる。未来の extension という同次元にある両技法による protension 指標の関連をみると, 相関係数は .329 ($P < .10$) と低かったが, H 群・L 群間比較で有意差がみられたことから, 未来の見通しの程度の指標として異なった側面をとらえているものの, 未来の extension 指標としてある程度の共通性を示したと考えられる。そして, Events Test の protension 指標と関連を示した指標が, cognitive 変数ではなく, empirical 変数であったことから, TAT で語られる漠然とした意向, 望みといったものは, Events Test で引き出される現実的な見通しに直接かかわってこないものと考えられる。つまり, 個人の生活における出来事を通しての見通しとは明らかに評価側面が異なるということである。Events Test の protension 指標と TAT の RetC 指標との関連については, 相関係数に拠り所を求めればその値は低く, 偶然によるものとも考えられる。

TAT の extension 指標相互の積率相関係数を算出したところ, Table 10 に示すように, いずれも有意水準にあった。このうち, protension または retrotension の empirical 得点に対する cognitive 得点 (ProE に対する ProC, RetE に対する RetC) については, 同じ temporal direction ということで高い相関を示したものと考えられる。一方, protension と retrotension 間についても, empirical 得点・cognitive 得点にかかわらず高い相関がみられた。これらの指標間の相関は, 以前の研究 (Epley & Ricks, 1963; Wohlford, 1966, 1968)

で報告された相関係数とほぼ同様の結果であった。

要 約

本研究は、女子学生を被験者とし、青年期における time perspective の extension と自己像の関連について調べたものである。extension 指標を Events Test (直接的技法) と TAT (間接的技法) から引き出し、各指標における上位群 (見通しのよい者)、下位群 (見通しのよくない者) を25項目からなる SD 法形式の自己像尺度により比較した。その結果、過去への明確な extension と positive な自己像との関連が見られたほか、「価値ある—無価値な」という項目対と TAT の3種の extension 指標との negative な関連が見い出された。また測定技法間の関連、つまり TAT と Events Test における extension 指標間の関連を調べたところ、Events Test の protension 指標と TAT の empirical protension 指標との間にある程度の関連がみられた。結果の解釈には、自我同一性概念の導入がなされた。なお、TAT の time span 得点化にあたっては、Wohlford のスコアリング マニュアルを補足・修正して用いた。

謝 辞

本論文の作成にあたり、御指導いただいた日本大学文理学部細木照敏教授、ならびに御校閲いただいた岡山理科大学河野昌晴教授に厚く感謝致します。

引 用 文 献

- Dickstein, L. S., & Blatt, S. J. 1967 The WAIS picture arrangement subtest as a measure of anticipation. *Journal of Projective Techniques & Personality Assessment*, **31**, 32—38.
- Dickstein, L. S. 1969 Prospective span as a cognitive ability. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, **33**, 6, 757—760.
- Dickstein, L. S. 1975 Self-report and fantasy correlates of death concern. *Psychological Reports*, **37**, 147—158.
- Epley, D., & Ricks, D. R. 1963 Foresight and hindsight in the TAT. *Journal of Projective Techniques*, **27**, 51—59.
- 木村法子 1983 青年期における対人恐怖的心性について—自己像との関連から— *心理臨床学研究*, **1**, 1, 7—17.
- Klineberg, S. L. 1967 Changes in outlook on the future between childhood and adolescence. *Journal of Personality & Social Psychology*, **7**, 185—193.
- レヴィン 猪股佐登留 (訳) 1974 社会科学における場の理論 誠信書房 p.86 (Lewin, K. 1951 Field theory and social science. New York: Harper).
- 村瀬孝雄・村瀬嘉代子 1966 自己像尺度作成の試み 日本臨床心理学会編 1966年度版臨床心理学の進歩, 178—186.
- Murray, H. 1959 Preparations for the scaffold of a comprehensive system. In S. Koch (Ed.) *Psychology: A study of a science* Vol. 3. Formulations of the person and the social context. New York: McGraw-Hill, pp. 7—54.

- 小川隆章・高橋君江・吉野貞慶・長塚和彌 1974 小中学生の想像物語にみられる time perspective と学業成績、達成動機等との関係 日本教育心理学会第16回総会発表論文集, 144-145.
- Rakowski, W., Barber, C. E., & Seelbach, W. C. 1983 Comparability and short-term stability of techniques to assess extension of thinking about one's personal future. *Perceptual and Motor Skills*, **56**, 559-564.
- Sqyres, E. M. 1981 Guidelines for use in scoring TAT stories for time-span. *Perceptual and Motor skills*, **52**, 333-334.
- Sqyres, E. M., & Craddick, R. A. 1982 A measure of time perspective with the TAT and some issues of reliability. *Journal of Personality Assessment*, **46**, 3, 257-259.
- 陶山 智 1987 Time perspective 構造に関する一研究 —Events Test・Orientation Test・時制に対する評定尺度を用いて— 加計学園岡山理科大学 健康管理室・センター 健管報, **4**, 80-88.
- Teahan, J. E. 1958 Future time perspective, optimism, and academic achievement. *Journal of Abnormal & Social Psychology*, **57**, 379-380.
- 戸川行男 1953 絵画統覚検査解説 金子書房.
- 都築 学 1981 大学生における時間的展望の研究 日本教育心理学会第23回総会発表論文集, 424-425.
- 都築 学 1982a 時間的展望に関する文献的研究 教育心理学研究, **30**, 73-86.
- 都築 学 1982b 青年自己像と時間的展望との関係 日本心理学会第46回大会予稿集 251.
- Wallace, M. 1956 Future time perspective in schizophrenia. *Journal of Abnormal & Social Psychology*, **52**, 240-245.
- Wohlford, P. 1966 Extension of personal time, affective states, and expectation of personal death. *Journal of Personality & Social Psychology*, **3**, 559-566.
- Wohlford, P. 1968 Extension of personal time in TAT and story completion stories. *Journal of Projective Techniques & Personality Assessment*, **32**, 267-280.
- Wohlford, P. Protension, retrotension, and extension of personal time in fantasy-stories : a scoring manual based on the Epley-Ricks system. Order Document No.9932 from ADI Auxiliary Publications Project, Photoduplication Service, Library of Congress.
- Wohlford, P., & Herrera, J. A. 1970 TAT stimulus-cues and extension of personal time. *Journal of Projective Techniques & Personality Assessment*, **34**, 31-37.

Appendix 1 質疑段階における教示

「物語に含まれている時間を聞きたいのですが、つまり、それぞれの図版において描いてもらった行動にかかる時間はどのくらい前からはじまり、どのくらい先までか、その範囲を教えてください。別な言い方をしますと、お話が現実に入ったとしたら、描かれた登場人物の行動は、どのくらい前からはじまり、どのくらい先までかを教えてください。その際、できるだけ、話してもらった時点の物語に忠実をお願いします。おそらく、その絵のシーンが現時点であると思います。そのシーンから考えて、ある出来事または区切りになるところが、どのくらい前か、どのくらい後かをそれぞれ教えてください。」

Appendix 2 TATの time span 得点化における補足、修正

- (1) time span が評定尺度上の境界にあたる場合、より控えめな得点を与える。
- (2) 次に挙げる内容が含まれているとき、その物語は得点化しない。
 - a) 非現実な人間・植物・動物。
 - b) 不可能な行動と出来事。
- (3) 物語が刺激図版から離れて展開された場合でも、明確に述べられているならば empirical extension とし、願望・意向等、曖昧であるならば cognitive extension とし得点化する。
- (4) ある被験者のある物語について time span を評定する場合、その被験者の他の図版における物語を参考にすることで、大変公平な time span を直感的に把握することが可能である。

- (5) 反応段階における additional statement (“その後どうなりますか” との促しに対する反応) も得点化の対象とする。
- (6) 質疑段階において被験者が述べた事柄が、反応段階におけるプロトコルにみられなければ、少なくとも empirical extension としては得点化しない。
- (7) 質疑段階での情報(被験者の反応)を参考に、反応段階での物語を評定するが、その際、採用する質疑段階での情報は、反応段階での物語からみて、了解可能なものとする。
- (8) 絵の描写のみからなる反応は、絵の状態の前後にいくらかの time span が期待されても、連続する行為が言語化されていなければ得点化しない。
例) ・青年が窓から外を眺めながら、いろんなことを考えているところ (RetE=0)。
・寝苦しいので、起きて窓を開け、きれいな月を見ているところ (RetE=1)。
- (9) “死ぬまで静かに暮らしていく” といった叙述に対し、“死” までの年月が8年(質疑段階での情報)である場合、ProC=8を与えた。登場人物が老人である場合の protension, 子供である場合の retrotension には同様の注意が必要である。
- (10) 語りはじめは、願望、予期のレベルであった叙述が、しだいに明確さを帯びることがある。この場合は empirical extension として評定を行った。
- (11) 登場人物の夢、空想、思い出は、明確に述べられていても、cognitive extension として評定を行った。

A Study of Time Perspective in Adolescents

— on extension and self-image —

Satoshi SUYAMA

Department of Planning and Admission, Planning Section

Okayama University of Science,

Ridai-cho 1-1, Okayama 700, Japan

(Received September 30, 1988)

This study was aimed to investigate the relationship between the extension of time perspective and self-image in adolescents. The extension was assessed by Events Test (direct method) and by TAT (indirect method) using undergraduate female students as subjects (Ss). The TAT story protocols were mainly scored according to the Wohlford scoring manual. The subjects with higher scores on each of the extension measures (H-group) were compared in the scores on the self-image scales to those who scored lower (L-group).

The following results were obtained :

- 1) Ss in H-group on the explicit extension into the past (empirical retension) showed more positive self-image than Ss of shortened that kind in L-group.
- 2) Three out of the four TAT scores were negatively related to one specific pair of adjectives : *valuable-unvaluable*.
- 3) In relationship between the direct and indirect methods, the Events Test protension score was somehow related to the TAT empirical protension score.